

## ツバキ=椿

### 1) 椿の霊力と信仰

ツバキはツバキ科の常緑低木または高木で、本州、四国、九州の海岸近くの丘陵地帯や山地に自生し、大きなものは高さ17~18mに達する。真冬から早春にかけて径5cmほどの比較的大きな5弁の花を咲かせる。花卉の基部は癒合しており、花色、花形ともに変化が多く、白から黒紫色にいたるまで、黄色と青系のもの以外はほとんど日本に自生する。和名の由来は葉に艶のあることから『ツヤハギ』もしくは古語の『ツバ』、つまり光沢のあるという言葉によるものと思われる。このほかにも葉が厚いことから、『アツバギ』『寿葉木』だとする説などいろいろとある。一方、朝鮮ではこの木を「冬柏」を意味する『ツンバク』と呼んだことから、これが訛ったものともいわれている。

椿の仲間には秋咲きの椿ともいえる山茶花(サザンカ)や、お茶の木の他に、夏椿(別名シャラノキ=誤用により娑羅双樹と言われることが多い)、榊(サカキ)、柃(ヒサカキ)などがあり、どれも神仏との関わりが深く、今でも神棚に上げる地方も多い。これは1年中葉が落ちないことと、葉に独特の光沢があるからだろう。因にヒサカキは『姫榊』(ヒメサカキ)のことで榊より小振りである。また野性のヤブツバキの自生地はやや南に偏ってはいるものの、太平洋の海沿いに東北地方まで広がり、一方、秋田、山形から滋賀県にかけての日本海側には、雪椿(ユキツバキ)と呼ばれる灌木性の椿がある。また鹿児島県の屋久島にはリンゴツバキと呼ばれるものがあり、種子の直径が5~7cmにも及ぶ。この種子は海流に乗って周辺の島々や山口県あたりまで分布を広げ、さまざまな自然交雑種を作り出している。

椿の学名は『*Camellia japonica*』で、この属名のカメリアはチェコスロバキアの宣教師で17世紀にマニラに在住し、東洋の植物を採集したことで知られる、G.J.カメルスの名に因む。彼は帰国するとこの花を時の女王マリア・テレジアに献上したという。現在の椿はほとんどが鑑賞用だが、種子はオレイン酸を多く含み、昔から椿油は整髪油として優れ、裂毛、抜け毛などの防止にも用いられてきた。この他、化粧用、食用、また工業用の機械油にも適しているうえに、搾りかすは害虫駆除にも用いられ、捨てるのはほとんどない。材は固く緻密で各種の道具類、楽器、木魚、印鑑などの細工ものに用いられるほか、薪炭としても優れており、その灰は漆器の研磨にも用いられている。特に葉からとった灰は『山灰』といい、釉薬や、水に溶かして黄八丈を染める媒染剤としても使われた。かつては藍染めや茜染め、紫染めなどの媒染材として欠かすことのできない大事なものだ。このため椿は今で言えば、国家を支える当時の先端産業の一つ、と言っても過言ではない。まずこのことをよく記憶にとどめておいていただきたいのである。

椿は古来霊力を持つ神秘の木であった。『日本書紀』では景行天皇が、豊後の国で「土蜘蛛」を退治した時、椿で作った『槌』を用いたことが記されている。そこでこの『日本書紀』の一説を記すと、次のようになる。

「今多(イサハ)に兵衆(ツツメ)を動かして、土蜘蛛を討たむ。若(モ)し其(リ)れ我が兵(ツツメ)の勢いに畏(オ)りて、山野に隠れてば必ずに後の愁いを為(ナ)さむとのたまふ。則ち海石榴樹(ツバキキ)を採りて、椎(ツチ)に作り兵(ツツメ)にしたまふ。因(ヨ)りて猛(タ)き卒(ツツメ)を簡(エ)びて、兵(ツツメ)の椎(ツチ)を授けて山を穿(ウ)ち草を排(ハ)ひて、石室(イシム)の土蜘蛛を襲(ウ)ひて、稲葉の川上に破りて、悉(トコト)くその黨(カマ)を殺す。血流れて踝(クルガシ)に至る。故(エエ)、時人(トキヒト)、其の海石榴(ツバキ)の椎(ツチ)を作りし處(トコロ)を海石榴市(ツバキチ)と曰(イ)ふ。亦(マタ)血の流れし處を血田(チタ)と曰(イ)ふ。

ここでいう海石榴市は後述するとして、血田は地名として今でも残っている。また土蜘蛛は『常陸国風土記』によれば、八握脛(ヤツカハギ)とか山の佐伯(サエキ)、野の佐伯、国栖(クズ)ともいい、土窟(ツチムロ)に住み、狼の性と、梟(フクロウ)の情を持った人々のことであるとしている。このことは一般の農耕民とは異なる生活をした、いわば日本の原住民のような人々が、存在したことを暗示するもので大変興味深い(04-01-04 葛の項参照)。土蜘蛛が、どんな人々かは別として景行天皇が、これを討って中央集権へと歩みを進めたことは確かであろう。また『古事記』の「雄略天皇記」には、『三重の采女』の話があって、こちらの方は次のように語られている。

倭(ヤマト)の この高市(タカチ)に 小高(コタカ)る 市(チ)のつかさ 新嘗屋(ニイハヤ)に生い立てる葉広(ハヒロ)ゆつ 麻都婆岐(マツバキ=真椿) 其(シ)が葉の広(ヒロ)り坐(イマシ) 其の花の 照り坐(イマシ)す 高光る 日の御子に豊御酒(トヨミ)献(タマ)らせ事の語り言(コト)も 是をば とうたひたまひき。

と記されている。これは椿の葉と花はゆったりと輝いており、天皇の繁栄が広がっていることを称えたものになっている。当時はいわれのある植物を天皇の繁栄にたとえる例は多く、この前段には雄略天皇の繁栄を、櫻の葉の繁りにたとえて、命拾いをした巫女の話も語られているのである(03-03-08 櫻の項参照)。また仁徳天皇の皇后は「葉広斎(ハヒロユ)つ麻都婆岐(マツバキ=真椿) 其(シ)が花の照り坐し(イマシ) 其が葉の広がり坐すは大君ろかも」と詠んでおり、これは前述の『古事記』の雄略の記述とも重なってくる。椿は冬になっても葉を落とさず、葉の美しく輝いているところから、この木には神が宿っていると思われていた。このため椿は天皇の権威の象徴ともみなされ、平安時代には宮廷で正月に作られた卯杖(ウヅエ)や卯槌(ウヅチ)にも椿が用いられた。卯杖は悪鬼を追放するものとして、正月の上の卯の日に、六衛府(ロクエフ=左右衛士府、左右兵衛府など6衛府)から天子に奉られるもので、桃の木や梅の木で作られているものも多いが、美しく装飾をほどこされた椿の卯杖

が正倉院にも残されている。青森県の下北半島の巫女であるイタコが、椿で作られた槌を咒(マジナイ)の道具に用いていたのもこのためであろう。福井県の三方五湖にある縄文時代の遺跡『鳥浜貝塚』からは、椿の材で作った石斧の柄や、椿細工の櫛などとともに、弓筈(ユミハズ=弓の両端の弦をかけるところ)に『桜』の樹皮を丹念に巻いて補強し、赤漆を塗ったものも出土しており、これらは5,000年ほど前のものと思われるが、日用の道具とは考えにくく、呪術的なものか、祭祀に用いたものと考えられており、椿と日本人の長い歴史を物語っている。

いずれにしる椿の木には、霊力があると信じられていたために、椿の老木は御神木とされているところも多い。島根県松江市の出雲八重垣神社(ヤエガキジンジャ)にある『連理の椿』(レンリノツバキ=根元が一つになっている椿=01-06-04 桜の項の長恨歌参照)、岩手県大船渡市の熊野神社にある『三面椿』などは特に有名である。

一方、岩手県胆沢郡胆沢町にある於呂閉志(オロヘシ)神社の祭礼では、参詣者に笹と椿の枝に神符をそえたものを授けて、椿と神符は田植え終了後に水口(ミナクチ)にさして、虫除けにするという。これは椿の霊力が豊作をもたらすと信じられていたからであろうが、椿油をとった搾りカスにはサポニンが含まれており、殺虫剤にされていた事とも関わりがあるのだろう。この他にも椿の老木は多く、富山県氷見市の老谷(オイダン)にある『さしまたの巨椿』と呼ばれている椿は、単幹の藪椿としては日本一の大樹で、推定樹齢は700~800年といわれている。

椿はこのように霊力のある木と見られていたことから、「婚礼の宴」や「元服の宴」を彩る花としても用いられてきた。お正月の門松において、松の替わりに椿を用いるところもある。山形県の羽黒山では山伏の峰入りでも、椿を供花する習わしがあり、薬師寺の花会式(ハナエシキ)にも椿の造花を初め、10種類の花が用いられている。東大寺では二月堂の修二会(シュニエ)の、いわゆるお水取りの儀式では、花揃えと呼ばれる紅白の椿の造花が供えられる。これは大仏開眼供養が開かれた、天平勝宝4年(752年)に始まったもので、1200年もの長きにわたって続いている。このお水取りの行事は福井県の小浜から東大寺まで水を送るところから始まるので、『閼伽井』(アカイ)のことを別名『若狭井』(ワカサイ)ともいう。伝説によれば二月堂の開祖である実忠(ジツチュウ)和尚により752年に始められた修二会の行法中に、全国17,000の神名を読み上げたが、若狭の神明だけが魚釣りに出ていて遅刻した。諸神がそれを咎めると、お詫びに道場の傍らに香水を奉ろうと祈念した。すると不思議なことに大岩がぐらぐらと揺れて二つに割れ、黒白の二羽の鶴が飛び出し、続いて清水が湧き出したと伝えられている。従って若狭では『お水取り』とはいわずに『お水送り』の行事といい、二月堂と若狭はつながっていると信じられている。この式を執り行なう若狭の小浜にある『神宮寺』では、奈良のお水取りに先立って、10日前の3月2日に法要を営んでから、遠敷川(オニユウガワ)の上流にある『鶴の瀬』まで行き、送水文を

読み上げて、これを流れに投げ込み式が終わる。現に鶴の瀬の川床には、奈良まで繋がっていると伝えられている洞窟があって、日本名水百選にも入る名水が蕩々と流れている。またお水送りの期間中は流れを絶つことから、音無川の別名もある。この一連の行事は奈良の東大寺の行事と、いわば表裏の関係にあるもので、若狭に春の到来を告げるものである。この地は海を跨げば朝鮮半島で、東大寺を造った工匠たちは大半が大陸からの技術者だともいわれていることから、お水送りの行事とお水取りの行事は、大陸から奈良の都までの、人の流れを暗示するものであるのかもしれない。

ところで6世紀の中頃、このあたり一帯は蘇我氏の支配地域であったといわれている。当時の日本は朝鮮半島からの渡来人が、国家の中枢に少なくなかった。この蘇我氏も百済からの帰化人として知られ、物部氏と激しく覇権をめぐり抗争を繰り返していた。そして物部氏が主に関西から西の中国、四国、九州方面に強い地盤を有していたのに対して、蘇我氏は関西、中国地方から東のむしろ中部方面に強い地盤を有していた。このため大陸との通商ルートにしても、物部氏が九州経由であったのに対して、蘇我氏は若狭あたりから朝鮮半島へのルートを用いていたことが想像される。この仮説を銅鐸に記された絵文字を解読することにより見事に立証した人がある。大羽弘道先生で、その著書『銅鐸の謎』に詳しく記されている。先生は滋賀県野洲郡中洲村で出土した高さ42cmの銅鐸に記された絵文字を

犬上(イカミ)、鹿深(カカ=甲賀のこと)、阿佐井(アサ)、伊香(イ)、加賀の国に、秋津(アキツ)の入鹿(蘇我入鹿のこと)の鑄物師(イヅ)、河内(カワ)真神(マカミ)の狛犬人(コマイヒト)造(キヅク)。

と解読したのである。これは何を意味しているかということ、まず大和から甲賀、犬上、阿佐井、伊香を経て加賀に至る通商ルートがあったことを暗示しており、秋津(大和のこと)の、蘇我入鹿の鑄物師であった河内真神の狛犬人が、これらの国々のために銅鐸を造ったと記しているのである。先生は『狛犬人』の読み方には問題があるかも知れないとしながらも、かれこれ100年後の東大寺の鑄工の中に『狛皆万呂』(コマミナマロ)の名前が見えるところから、狛の名を持つ鑄物師が当時から存在したことは間違いないだろうと指摘されている。となると、若狭と東大寺を繋ぐ工人のルートがますます明白に見えてくる。また先生は銅鐸の出土するエリアこそ、蘇我氏の支配領域であったことを説いており、この説は銅銚、銅剣などが中国地方の西部や四国、九州から多く出土している理由をも間接的に説明しているわけで、注目に値する。

さてこれより少し前の6世紀初め頃、この若狭の地から、第26代の継体(ケイタイ)天皇が誕生している。この天皇は日本史の中では特異な存在として知られている。朝鮮の歴史資料である『百済本紀』(クダラホンキ)によると、継体25年にあたる531年、辛亥(シンガイ)の年に、日本の天皇とその皇太子が、ともに死んだことが記されている。これを『辛亥の変』としてとらえる学者もいる。当時、中央政権では蘇我

馬子の父にあたる、蘇我稲目(イナメ)が実権を握っていた。稲目は娘を欽明天皇の后として、後に用明天皇、推古天皇、崇峻天皇の外祖父として権勢をほしいままにすることになる。『百濟本紀』の記述が仮に史実に基づいているとすると、この『辛亥の変』には蘇我稲目がなんらかの役割を果たしているわけで、同時に蘇我氏が継体天皇の誕生そのものにも、大きな役割を果たしていたのかも知れない。若狭はそんな日本の古代史の不透明な部分を秘めている土地柄で、そこには蘇我氏と、それに椿の花が何故かつきまとうのである(03-05-18-6~8 ヒシの項参照)。

若狭の小浜市青井の『神明神社』には『八百比丘尼』(ハッピークビクニまたはヤオビクニ)と呼ばれる女性の木像がある。この像は手には白玉椿の小枝を持っており、伝説によれば何と 800 年も生きて、その間全国を広く行脚し、あちこちに椿の苗を植えたと伝えられている。小浜の『空印寺』(クインジ)という寺には、この八百比丘尼が入定(ニュウジョウ=聖者や僧侶が死去すること)したといわれる洞窟が今でも残されており、入定する前に「この椿の花が咲く限り私は生きている」と言ったその『白椿』が、今でも毎春見事な花を咲かせている。また丹後の京都府与謝郡加悦町(ヨサグンカヤチョウ)の『滝』には千年椿といわれている推定樹齢 1,200 年ともいわれる『黒椿』の大木があって、府の天然記念物に指定されている。この地方は三方五湖の鳥浜貝塚の遺跡とも近く、なんらかのつながりを持ちながら、椿の持つさまざまな信仰と、ご利益を今日に伝えているのである。

さて、この能登半島の付け根付近は、大陸から最も楽に日本に来る通路にもなっていたらしい。朝鮮半島から船を出すと必ずしも最短距離ではないものの、ほとんど船を漕がずに対馬暖流に乗って、このあたりに漂着することができる。大きく突き出た能登半島のおかげで、船は新潟の方までは行かずにここに辿り着くというわけである。1903年(明治36年)には京都府熊野郡久美浜町函石浜で、2枚の中国貨幣が発見された。この貨幣は『貨泉』といわれるもので、前漢末のどさくさに紛れて『平帝』を暗殺し、自ら新皇帝と称した『王莽』(オウモウ)が、西暦8年に『新』の国を興したときに鑄造したものである。この貨幣は1998年には鳥取県青谷町の青谷上寺地(アオヤカミジチ)遺跡からも発見されており、日本海側と中国との交流を物語る証でもある。日本では当時はまだ弥生式時代の末期のことであったが、『貨泉』の発見はこの地方に、優れた文化を持った大陸の人間が、対馬海流に乗って流れ着いたことを、物語るものでもあった。いや流れ着いたというのはあくまでも想像であって、王莽の頃、中国では再び匈奴の侵入や、新帝国内部でも混乱が続いたから、あるいはこうした内乱を避けた難民とか当時の亡命者だったかも知れない。そして丹後の伊根町新井崎(イネチョウニイザキ)というところには徐福(ジョフク)という人間を祀る新井崎大明神があって、徐福は2000年も前に秦の始皇帝の命により不老不死の薬を求めて、この地に漂着したと伝えられている。いわばこの地は、大陸とは地続きだったのである。

ところで『大漢和辞典』を紐解いて椿を探してみると、『海榴』として記載され、椿のことであると記している。そして「海外から来たから海という。海石榴。」と続く。ではなぜ石榴(ザクロ)なのだろうか？ 椿の実が完熟すると果皮は3裂する。この割れ方が石榴(ザクロ)に似ていたために、海外からもたらされた石榴という意味で、『海石榴』と記したのではないだろうか。特に『リンゴツバキ』といわれる品種は、主に屋久島の亜高山帯に自生するもので、その果実はリンゴのように大きく直径が5~7cmにも達する。海流に乗って周辺の島々や山口県の海岸地帯にも漂着し、そこで在来種との自然交配も行なわれている。『海石榴』はおそらくこのリンゴツバキのことだったのであろう。さて『大漢和辞典』を読み進めると、江總の詩『山庭春日詩』を引用して「岸は緑にして／河柳開き、池は紅にして／海榴照る」とあり、さらに続く。今度は『東堂に宴す』という随代の詩を引用して「海榴ひらき／尽きんと欲し／山桜未だ飛ばず」と記しているのである。このことは日本の椿が早くから中国に渡っていたことを如実に物語るものであろう。中国では椿の仲間を「山茶」と呼び、山茶花もこれに含まれる。このことから『海榴』が日本の椿を表わしているものと推測できる。日本人は大陸との交易の中で、他の商品と共に椿も運んでいたのだらう。では何故椿なのだろうか？これは推測であるが『椿油』を採ったからと思われる。椿油については後述するとして、当時の植物油の中では最高級だったし、採油効率の高い食用油でもあった。若狭を中心に、大陸と椿油の交易が行なわれていたとしても不思議はない。というのも前漢の張騫(チョウケン)が、BC130年頃に、西方から油菜(アブラナ)や胡麻を伝えるまで、椿油は貴重な食用油だったからである。これに対してヨーロッパではオリーブ、新大陸ではヒマワリが椿油に匹敵する食用油だった。

さて『万葉集』には椿の歌は9首残されている。『椿』とも『海石榴』とも、はたまた『都婆伎』とも記され、『日本書紀』では『海石榴』と記している。前置きはさておき『万葉集』には次の一句がある。

紫は灰さすものそ海石榴市(ツバ 伊)の 八十(ヤツ)の衢(チマ)に逢える児や誰  
この『海石榴市』は平安時代には『椿市』と表記されており、一説によれば「椿の市」が立った所だという。現在は桜井市金屋付近とされ、何の変哲もない町並みに過ぎないためか、この「市」を否定的に考える学者も多い。しかし前述のごとく当時は布地を紫に染めるには「灰汁媒染」といって、椿の葉を焼いて作った灰を媒染剤(06-03-00 参照)として用いていた。「紫は灰さすもの」といったのはこのためである。今でも伊豆の大島では椿の灰を焼物の釉薬として利用している。この「灰」に関しては『染に関わる花と草』(06-03-11)のところで詳述するとして、何よりも大事なことは前述のごとく、椿が当時はたいせつな食用油の原料だったことである。従って椿の市が立ったとしても何の不思議もない。このあたりはまた長谷寺参詣の根拠地として栄えた所でもある。飛鳥時代には難波より大和川を遡って、はるばるやってきた随使、斐世清

(ハイセイセイ)の一行を、蘇我馬子と女帝推古がこの地で迎えたとされている。当時(608年)は水陸交通の要所として栄え、その地名が表わすように椿が多数植えられ、歌垣(ウタガキ)なども行なわれていたという。また『衢』は道のことで、四方に通じる大道を意味するところから、街の意味に転じたものであり、文字通り政治・経済・文化の中心だったのである。『歌垣』とは、男女が一カ所に集まり、歌ったり踊ったり、歌を交換したりする行事のことで、若い男女が自由に恋愛を楽しむところでもあった。歌の意味するところは、「あの海石榴市の歌垣で出会ったあの娘は、どこの誰なのだろうか。あの娘のことが忘れられない。」というものである。この歌は「問答歌」の男性方の歌で、「返歌」として次のように歌われている。

たらちねの母が呼ぶ名を申さめど 道行き人を誰と知りてか

当時は自分の本名を打ち明けるのは、よほど親しい人に限られており、女性が男性に対して自分の名前を明かすことは、求婚されてそれを承諾したことを表わす手立てでもあった。歌の意味するところは「母が呼ぶ私の名を申し上げたいところですが、たまたま出会ったあなたに、どうして明かすことができるでしょうか。」というものである。歌垣のよく行なわれた場所としては、このほかに筑波山麓や平城京の朱雀門前があり、『万葉集』の中に筑波山周辺の歌が多く含まれているのは、このためであろう。また当時の和歌は平安時代のものなどと比べるとずっと庶民的、かつ自然発生的なものとして、形式よりもその時々感情の表現が重んじられた。和歌という現代人にとっては筆でサラサラというイメージがあるのだが、これは平安貴族以降の和歌で、万葉時代の和歌はある種の節をつけて、どちらかという朗詠するものであったらしい。今で言えば流行歌を口ずさむというようなもので、ちょっとカラオケに行くようなノリだったのである。もう一つ万葉集の歌の中には物部広足の歌として

わが門の片山都婆伎(カヤマツバキ)まこと汝 わが手触れな土に落ちかも

というのがあり、当時から椿の散り方には特別な意識を持っていたことがうかがえる。ところがこのことは特に武家社会において、首を落とされることへの連想が働いて嫌われ、屋敷内には椿を植えない地方も多い。お見舞いに椿を持って行かないのも同じ理由で、大きな椿が神社や寺院などに限られているのもこのためである。

一方、広島県大竹市では椿は幽霊の木といわれており、昔話の中では人影花として人間の数だけ花をつけると信じられていた。平安時代の勅選集や物語、草紙類に椿のことがまったく記されていないのは、何かのために禁じられていたものか、御神木として極めて畏れられていたためかもしれない。東北地方の海ぞいの自生地では『椿山』などと呼ばれる聖域があり、椿を折ると暴風雨が起こったり、祟りがあると畏れられ、ここに近づくことさえ忌み嫌われていた。椿は全国各地で暴風、防潮、防砂などにも広く植栽されており、ここには多くの場合、椿山明神などが祭られていた。住民に椿を折ることを禁じたことから起こった伝説と見ることもできよう。

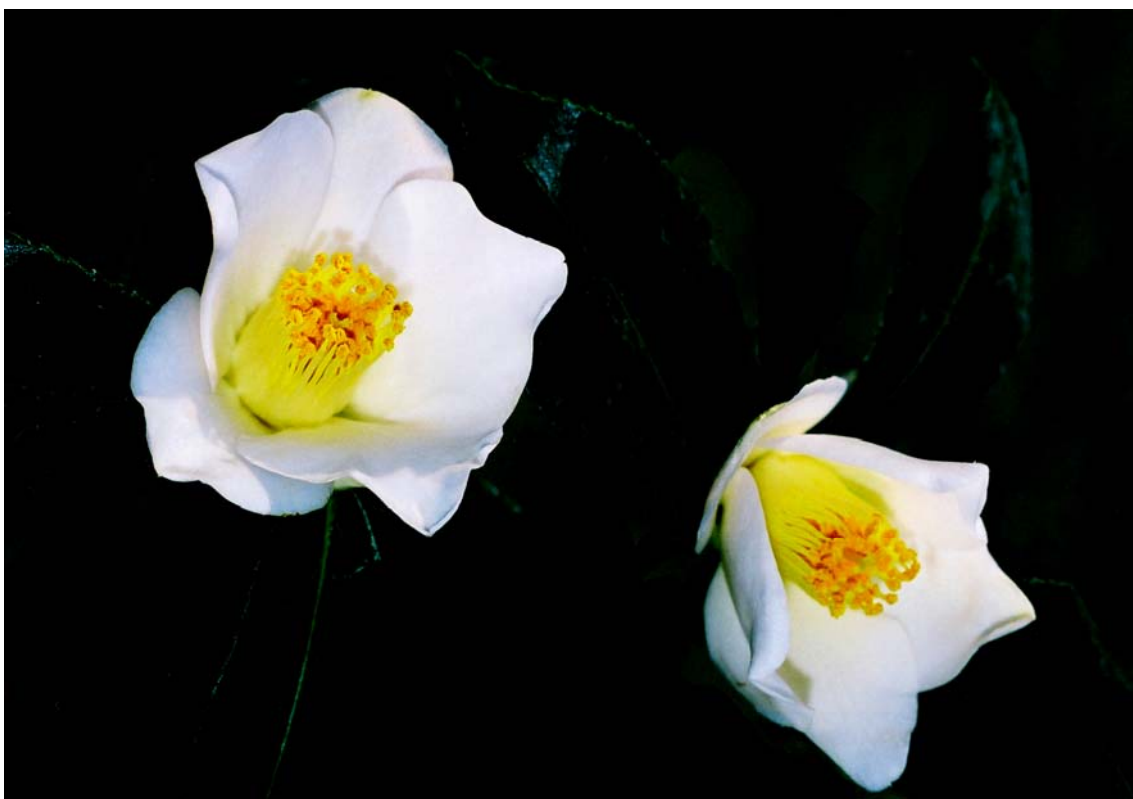


「白逆さ富士」は百合咲の椿。花は百合のような形をしており、長い筒状になる。一重椿の中でも特に趣がある。椿は種類も多く、収集家も多いが、百合咲とか茶花とか限定して集める人が多い。



「赤西王母」は西王母の自然実生。花卉の真紅、葯の黄色、そして筒芯の白と見事な調和である。





「白花桔梗咲椿」、桔梗咲きは「チューリップタイム」というアメリカで生まれた椿と、その子孫の「以津の夢」「夢の古里」ぐらいで、本種もそんな遺伝子を持った実生の椿なのだろう。



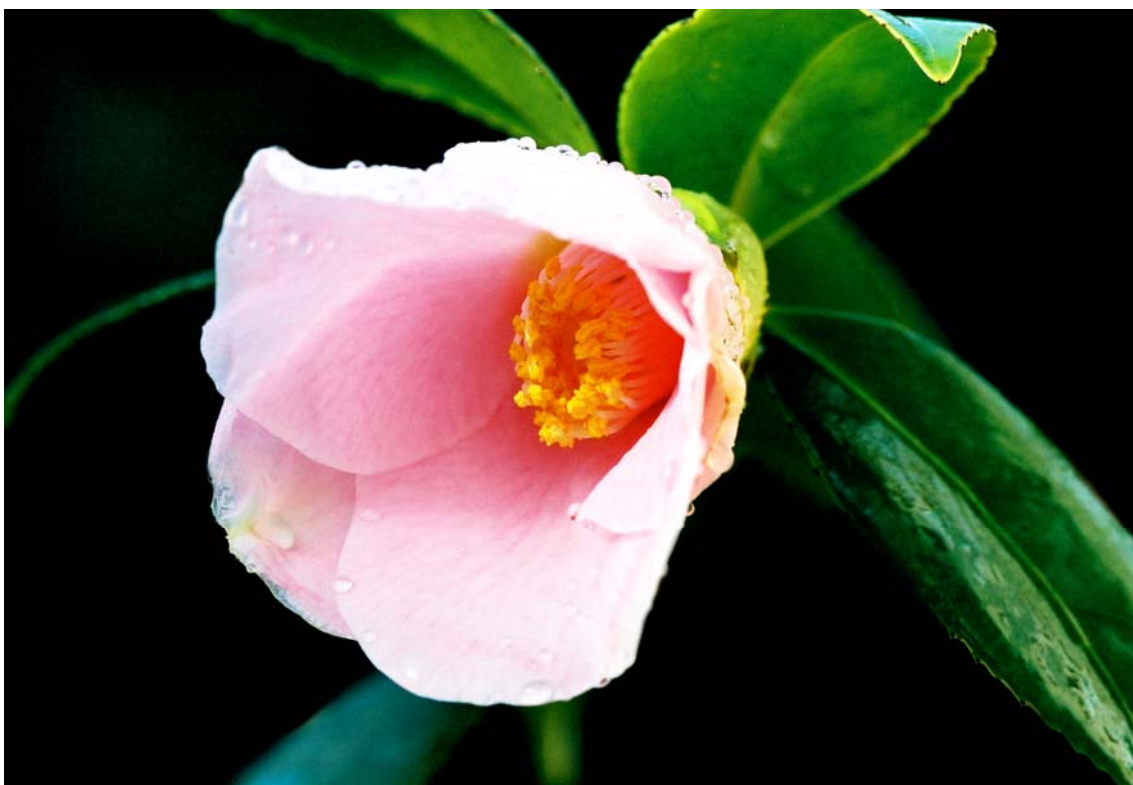
「百合絞」はもちろん百合咲種である。花形は長い筒状になる。



「森部(卯べ)赤藪椿」は福岡県久留米市田主丸町の藪椿の中から選別された自然実生の椿である。椿の場合このように自然実生で生まれた新種が実に多く、今後も期待されている。



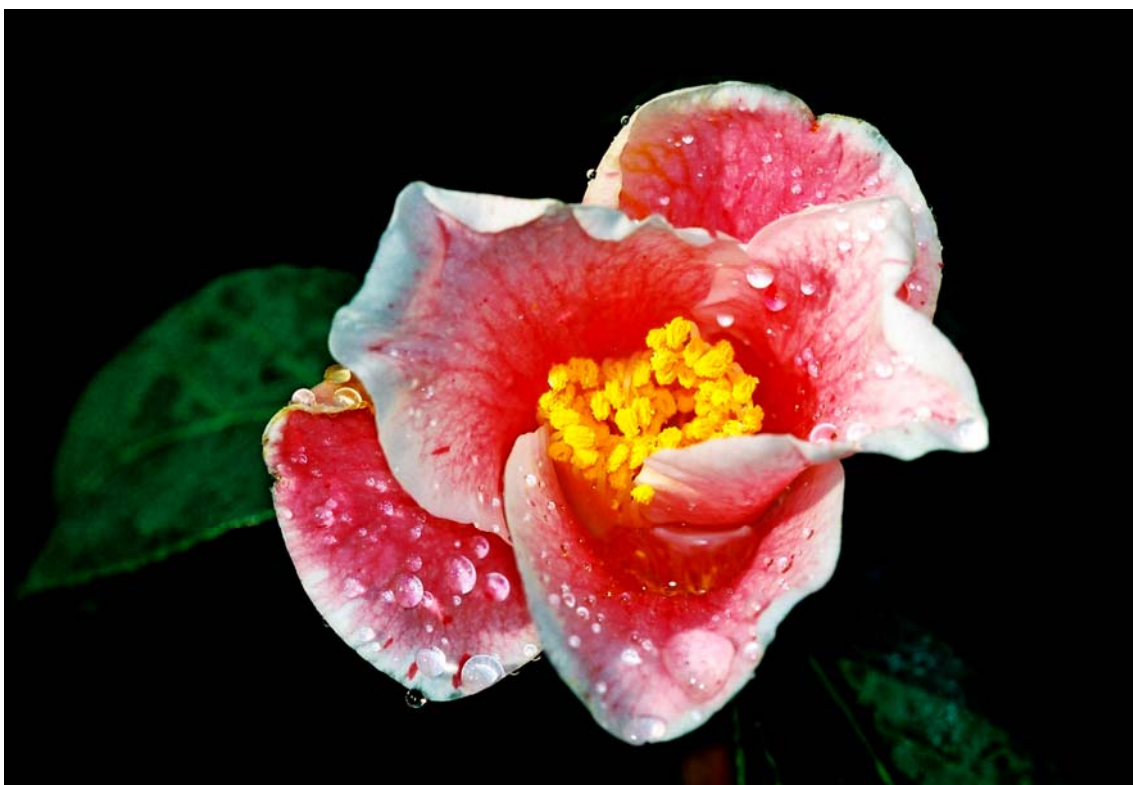
「夕月」は一重椿の中では極めて整った花形の美しい椿で、最後までこの形を保つ。



この「富岳の雀」も筒咲きである。ピンクの淡い色がなんとも優しげで、ファンも多い。しかしこのタイプの筒咲きはそれほど普遍的なものではなく、余り会う機会はないかもしれない。



「靈巖寺白藪椿」は京都靈巖寺の境内に古くから伝わる椿で、落花するまで形を崩さない。



「夕焼け富士」の花は桃色に白覆輪だが、これは白覆輪が鮮やかに現れた美しい花である。椿は若い木と老木とでは、しばしば異なった花を咲かせることが多く、それがまた楽しみである。



「白花つたの細道」は長く奥の深い筒咲のためピントが合い難い。葯の黄色も美しい名花である。



「侘び介」は茶花としてよく用いられている。このピンク色の他、白い花が咲くものもあり、白花はお茶室にさりげない風趣を添えるために生まれたような椿である。



「白玉」、この花も茶花として用いられることが多い。晩秋から咲き始める。



「初嵐実生」、これだけ弁面に皺の出る椿は珍しい。開花の際、花弁と苞の分離がうまく出来なかったのかもしれない。また「初嵐」は白の早咲きで、山茶花と競うように咲き始める。



「西王母」は淡いピンクの名花である。花形も最後まで大きく崩れることはない。 [目次に戻る](#)